

松太枝浜海岸清掃活動 報告書



ライオンズクラブ国際協会 334-D 地区 2R1Z
高岡アラートライオンズクラブ



目 次

趣旨・活動日	2
有志紹介	3
短歌	4-19
山田正樹 晴れ男	9頁
写真集	19-27
石川啄木	28
大伴家持	28
大谷翔平	29
野口健	30-31

有志による松太枝浜海岸清掃活動日 午前6時～

2021年 5月 12日 22日
2021年 6月 2日 9日 16日 23日 30日
2021年 7月 3日 7日 14日 21日 28日
2021年 8月 4日 11日 18日 25日
2021年 9月 1日 8日 15日 22日 29日
2021年10月 6日 27日
2021年11月 10日

雨・雷・強風で3回中止された。

合計日数 24日

合計活動時間 約144時間

合計ボランティア袋数 712袋

大型流木 約3.5トン

高岡市太田（松太枝浜海岸清掃活動とは）

第155回例会で会長挨拶山道樹里は発言した。

2021年5月30日砺波ライオンズクラブCN55周年に出席した時、来賓のガバナー岸省三は“ライオンズ活動の大事な事は小さな事を積み重ねる事です。”とスピーチした。彼の何回かスピーチを聴いたがその日のスピーチは私に強烈な印象を与えた。第147回新年例会3年1月5日テール・ツイスターの時間に自由にお話出来る時間を作る提案が苗加康孝よりあった。その後この時間に数名の会員が利用した。第153回早朝例会5月5日（松太枝浜海岸清掃活動）のテール・ツイスター時間で苗加康孝が“松太枝浜を綺麗にする為に毎日でも清掃したい”と呟いた。

その後、松太枝浜海岸清掃活動の有志が集い、毎週水曜日朝6時～7時迄アクティビティをする事になった。

コロナ禍で出来る奉仕活動は屋外で出来る環境問題に取り組みました。



高岡アラートライオンズクラブ会員有志に感謝し、私たちの活動を短歌で綴る。

右メンバー

関勝

燕昇司信夫

中村清志

山田正樹

波岡章

今川強

苗加康孝

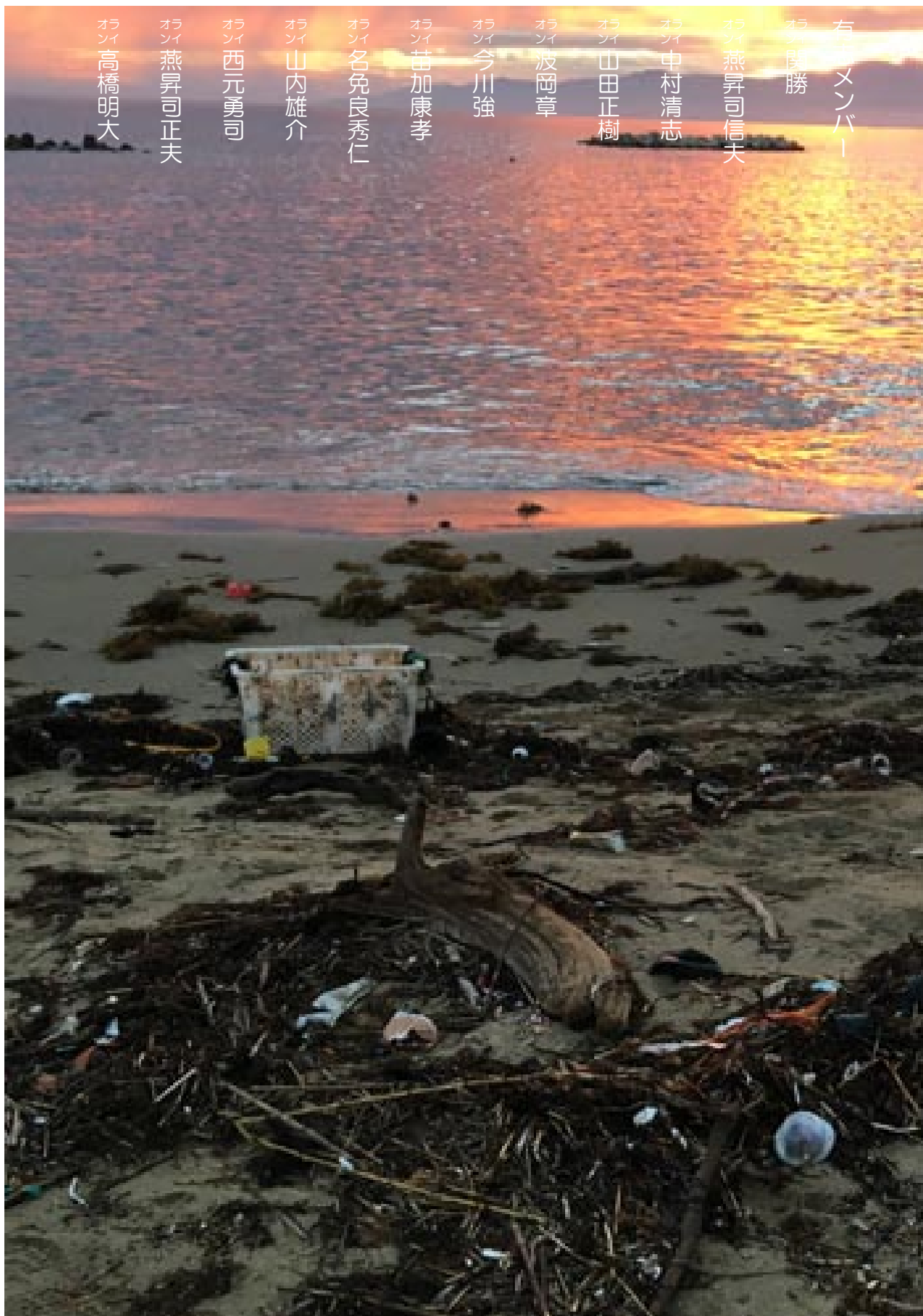
名免良秀仁

山内雄介

西元勇司

燕昇司正夫

高橋明大





有志
② オニ苗加康孝へ

明け初める
朝一番に
海に来て
砂浜のゴミを
拾い集める





③ 有志
が関勝へ

流木に

鋸音を

響かせて

砂浜に立つ

男の姿



有志 羽燕昇司信夫へ

④

東雲（しのめ）の

砂浜に来て

プラゴミの

いろに嘆きつ

拾い集める

有志 オライ波岡章へ

⑤

浜砂を

篩（ふるい）にかけて

プラスチックを

袋に集める

不断の力





⑥ 有志 オンライン山田正樹へ

一度たり

休むことなく

ボランティア

地球を護る

心のあれば

晴れ男

海岸清掃には皆勤賞を目指して参加してきました。7月毎週晴れの日が続きました。そうなる、空模様が怪しい予報の時は、正直、たまには雨が降ってお休みでもいいんじゃない？と期待していましたが、なんだかんだ言って結局いつも晴れました。そのことを

幹事オンライン燕昇司に、なかなか降らんもんですね。うまいこと晴れますね。

と話すと、あなたが雨よ降れ、雨よ降れと思えば思うほど空は晴れるんや。晴れろ、晴れろ、掃除したい、掃除したいと思えば雨になるんや。と笑われました。9月も毎週晴れて、オンライン燕昇司には、オンライン山田のおかげで晴れる！と皮肉られました。ついには私も諦めました。海岸清掃の日は必ず晴れるんだと。全部参加してやろうじゃないか！って、そう覚悟を決めました。覚悟を決めた十月は3連続で雨天中止です！まさにオンライン燕昇司のおっしゃる通りとなりました！

山田 正樹

有志
オンライン中村清志へ

遠くから

有志の一人

海に来て

黙々拾ふ

砂浜のごみ





⑧ 有志 オシ名免良秀仁へ

腕力の

ある君が来て

流木と

埋もれる綱を

掘り出しにけり

有志 オジ波岡章八

⑨

君が言う

「濱掃除して 心よし」

暁の海

背にうけながら



⑩ 有志
オリイ燕昇司信夫へ

プラゴミと
漁具・空缶と
流木を
仕訳け袋を
烏が狙う



分別をしっかりとしたが、その上にコンビニの食べ残しを置いた人があり
ベンチの下にカラスが食べ物を漁っている。カラスや猫はいつも餌を求めて。





⑫ 有志 オンライン西元勇司へ

曙の

松太枝浜に

急ぎ来て

寸暇なれども

掃除手伝う



有志 オンライン今川強八

⑬

ギター弾く

指を惜しまず

ゴミ拾う

缶のはじける

囊中の音



有志

オンライン 高橋明大へ

⑭

さわやかに

海の潮風

受けれども

足元見れば

浜に流木

燕昇司正夫

⑮

立冬の

松太枝浜に

人はいず

砂浜掃除

シーズンオフに





☞ 苗加康孝 ☞ 名免良秀仁 掘り起こし作業



☞ 燕昇司正夫 掘り起こし作業



県外の旅人が協力



☞ 山田正樹 篩いに砂



この漂着物はどこからきたのか？



キャンプで海岸が汚染された



大型プラスチックが大量に捨てられた



提案したら自治会で看板が備え付けられた



正夫 燕昇 流木の撤去作業



初めて活動した日のボランティアゴミ袋の山・流木も



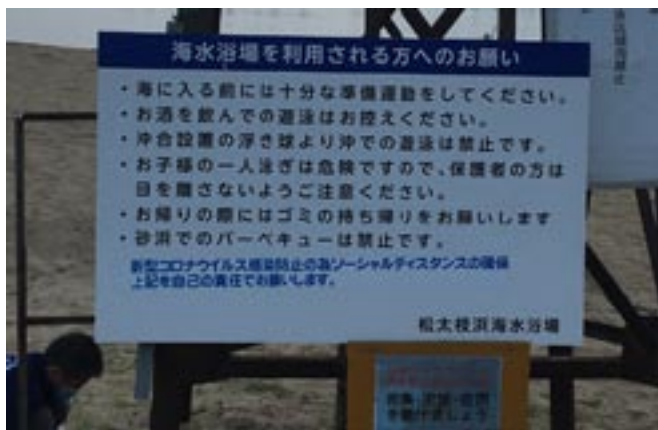
鉄塔の下に食べ物関係のゴミが大量に誰が捨てたのか？ キャンプを楽しむ人かと考えたが推理ははずれた



鉄塔の下に食べ物のゴミが運ばれた舟。犯人はイニシャルT



山田正樹 波岡章 鉄塔下のゴミ拾い



県・市に実情を話すと 看板が掛けられた



綺麗にした後、次週も捨てられていた 上記の舟で



初めて活動した日のボランティアゴミ袋の山・流木と奉仕活動参加者



鉄塔下も綺麗になりました



㊦山田正樹 ㊦山内雄介 ㊦波岡章 ㊦燕昇司正夫



黙々とゴミと向き合う会員



黙々とゴミと向き合う会員



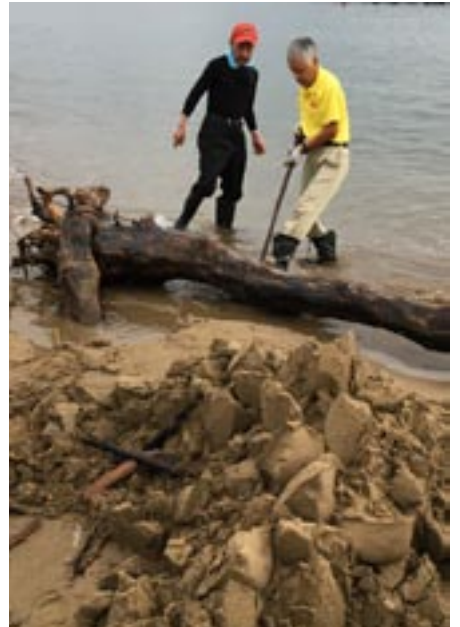
流木を切断・運搬集積



今日も大量の流木



流木を切断後



砂に埋もれた流木掘り起こし作業



流木を運搬 ㊦ 苗加康孝



切断流木を運搬 ㊦ 燕昇司正夫



㊦ 燕昇司信夫



砂に埋もれた流木掘り起こし切断準備3人かかり



風の強い日は ご覧の小枝が海外一帯に漂着 ㊟山田正樹



几帳面な分別作業 ㊟波岡章



細い体で頑張っています ㊟苗加康孝



綺麗にもっと綺麗に ㊟関勝



24 頁 篩いに掛け分類作業 ㊟名免良秀仁 ㊟関勝



後姿 ㊟名免良秀仁 ㊟燕昇司正夫 ㊟山田正樹



☎ 苗加康孝 ☎ 関勝 ☎ 山田正樹 ☎ 波岡章 ☎ 中村清志 今日のゴミ袋



☎ 中村清志 いつも篩い持参



☎ 燕昇司正夫 漁具のうき



☎ 関勝 小さな流木袋詰め



大量のゴミはカラス狙う（自治会関係者の弁）
ゴミ集積場の後はキャンプ場



大量の流木



不思議な流木だが・・・人工物だと次週気づきました。



流木で作られた祈りの場？



この人工物は誰が何の目的で作ったのか？
この撤去作業は時間がかかる迷惑至極



11 月最終活動日に確認に行くとやはり



海の荒れた日で多種多様のものが 40 袋程ありました



流木掘り起こした穴



㊦ 燕昇司正夫 ㊦ 山田正樹 今日は土方です 埋まった流木掘り起こし

重くて固くて



県の見解 砂浜中央に集めてください



切断前の流木
㊦ 苗加康孝 ㊦ 波岡章 ㊦ 山田清志



転がしながら ㊦ 関勝 ㊦ 中村清志
㊦ 燕昇司正夫

石川啄木 作

①6

東海の

小島の磯の

白砂に

我泣き濡れて

蟹とたわむる

大伴家持 作

①7

馬並めて

いざうち行かな

浜たにの

清き磯廻に

寄るする波見に

※ 大谷翔平を称える短歌一首

⑮

グラウンドの

小さなゴミを

翔平が

拾う姿の

大きな心

©Mikoto

野口健は環境を語る

「現場を見る」ことで、行動が生まれる

野口さんは 1999 年、25 歳でエベレスト登頂に成功し、当時 7 大陸最高峰の世界最年少記録を樹立しました。

エベレストの頂上は、卓球台二つ分くらいの広さです。遮るものがないので日差しが強く、北はチベットの平らな高原、南は何重にも連なるインドの山脈。壮大な眺めでした。青春の夢がついに現実となった瞬間でした。

僕はアメリカで生まれ、外交官だった父のもと、幼少時代からサウジアラビア、日本、エジプト、イギリスと各国を転々としてきました。なかなか勉強に集中できず、荒んだ生活を送るようになり、何とか進学した高校では、けんかをして停学になる始末でした。

そんなある日、書店で偶然、手にしたのが、登山家である植村直己さんの『青春を山に賭けて』という本でした。落ちこぼれて自信のなかった植村さんが登山を通して自分の価値を見だしていく。その内容に感動し、「自分も山に登りたい」と志を立てたのです。

その後、富士山をはじめ国内の山々を登り、17 歳の時、アフリカ大陸の最高峰キリマンジェロを登頂。この時、「世界 7 大陸の全ての最高峰に立つ」との夢を抱き、挑戦を始めたのです。

野口さんは登山活動のかたわら、シェルパ（ヒマラヤに住む民族で、登山隊の荷揚げ、案内人）の支援に力を注がれています。

幼い頃、父に世界各地へ連れていってもらいました。ただそれは普通の家族旅行とは異なるものでした。例えばエジプトに行った時は、観光地として誰もが行くようなピラミッドではなく、カイロ郊外のスラム街を訪れるのです。

父は言いました。「世の中にはレコードのように A 面と B 面がある。A 面は、放っておいても目に見える。でも B 面は、あえて行かなければ見えない。世の中の大事なテーマは B 面にあるんだよ」ヒマラヤ登山における B 面が、まさにシェルパの存在でした。

「環境」を大切にすることは、「生命」を大切にすることであり、「未来」を大切にすることである。

登山家が登頂に成功しても、それに命懸けで支えるシェルパに光が当たることはありません。事実、その陰で数多くのシェルパが事故などで命を落としています。

1995 年、ヒマラヤで雪崩が発生し、13 人の日本人が亡くなるという痛ましい事故が発生しました。この時、私の友人を含む多くのシェルパも犠牲になったのですが、日

本で報道されたのは、日本人の登山者とその家族ばかり。シェルパが取り上げられることは、ほとんどありませんでした。

シェルパの生活は貧しく、生計を立てるために、危険を冒してでも山に登らざるを得ない。不慮の事故で亡くなった場合、残された家族はどうなるのか。僕にとっては見過ごせない問題でした。そこで 2001 年に「シェルパ基金」を立ち上げ、遺族の子どもたちへの教られ育援助を始めたのです。世界中の登山家が賛同し、寄付をしてくれました。

ある遺族の少年は、この基金で学校に通い続けることができ、後年、日本に留学。その時わざわざ僕に会いに来てくれたのです。

「今の自分があるのは、野口さんや日本人の人たちのサポートのおかげです。心から感謝しています」と日本語で話してくれました。本当にうれしかった。今でも忘れることはできません。

感動的なお話です。野口さんは、エベレストや富士山の清掃活動にも尽力してこられました。

実をいうと、最初から環境問題に関心があったわけではないんです。きっかけは「見てしまった」ことなんです。エベレストに登るたびに、ごみが目について仕方がなかった。日本語が書かれたごみもたくさんあり、ひとつとではありませんでした。海外の登山家からも「日本人はだらしない」「ヒマラヤをマウント・フジのようにするな」、などと言われ、悔しい思いをしていました。それを見返すために清掃活動を始めたのです。

ただ、富士山については最初、ピンと来ませんでした。当時の僕はまだ、雪に覆われた富士山しか登ったことがなく、富士山が汚いなんて。思いもよらなかったのです。それで、夏に登ってみるとごみだらけ。青木ヶ原樹海なんて、不法投棄されたタイヤの墓場でした。注射器などの医療廃棄物もあり、異臭が漂っていました。



そこで、2000 年から富士山清掃活動を開始しました。当初はやっても、ごみは減らなかったのですが、協力者の増加とともに4年目あたりから減り始め、今では、5合目から上は、ほとんどごみはなくなりました。

「現場を見る」って、すごく大事で、自分の目で見て、知ってしまうと人って「自分にも何かできないか」と思うものです。どこか気持ちの中で「背負う」んでしょうね。そこから「じゃあ、ごみを拾おう」となる。私の活動の原動力も、そこにあります。

教育が夢をつくる

教育を受けられない子どものために学校を建設する活動も継続されています。08年には「マナスル基金」を設立し、ネパールのサマ村に学校をつくりました。

マナスル山麓のサマ村は標高3,600メートルほどの高地にあり、首都カトマンズから歩いて10日ほどの場所にあります。今も村人は自給自足の生活を送っています。

ある時、村の子どもたちに「みんなの夢は何？」って聞いてみたんです。すると皆、キョトンとしている。通訳のシェルバが「そんな質問、むだだよ。この村に夢なんて概念はないから」というのです。当時、村には電気もテレビもなく、大半の村人は外の世界を知らない。ヤクを放牧して芋を栽培する。それが全てだったんです。

子どもは、自ずと夢を持つもの――その認識が正しくないことに気付かされました。僕自身、植村さんの本のおかげで登山家になることができた。本を読み教育を受けることは、本当に大事なんですね。それで、寄付を募って村に学校をつくったんです。日本で使われなくなったランドセルを集め、プレゼントもしました。

ひとたび学校ができると、村の雰囲気ガラッと変わり、明るくなりました。村外からもたくさんの子供が学びに来ています。数年後に訪れた時、もう一度、子どもたちに夢を聞いてみたんです。

すると、「学校の先生になりたい！」「ヘリコプターのパイロットになりたい！」と、楽しそうに答えてくれたのです。すごいと思いました。人は教育によって可能性を大きく開くことができるんだと、改めて実感しました。

「一歩を」続ければ、たどりつける

変化はゆっくり進む

日本では子どもたちへの環境教育にも力を入れていますね。

子どもの成長に大きな影響を与えるものに「体験」があると思っています。体験に勝ものはありません。何か忘れられないような体験をすれば、子どもたちは行動を起こします。

小笠原諸島で、こんなことがありました。東京から南へ約1,000キロに位置するこの島では、島民が乗らなくなっ

た多くの車が不当に廃棄されていました。車を処分するには、船に乗せて内地まで運ばないといけません。お金がかかるのでナンバープレートだけ外して山の中に捨ててしまうんです。私有地に捨てられたごみは地主が対処することになっており、行政も手を付けませんでした。そこで、私が主宰する環境学校で学んだ島の子どもたちが「あの車を片付けたい」と、自ら立ち上がりました。手書きでポスターを作り、島にある数少ない信号機の前で街頭演説みたいなことを始めたのです。その熱意が島民の心に届き、最後は行政も動かし、車の撤去作業が始められたのです。

子どもたちが地域や世界に目を開き、行動を起こすきっかけをつくるのは大人の大事な役目です。子どもたちは自ら体験すると、それに興味を持ち、もっと知りたい、もっと探求したいとなる。これが本来の学びにつながるのです。現在、気候変動や自然災害など、さまざまな課題があります。地球社会を守るために大事なことは何でしょうか。

地球温暖化は、登山家としても肌身で実感しています。氷河がものすごい勢いで溶けていて、ヒマラヤの川の水量は増えるばかりです。エベレストのふもとのイムジャ湖という氷河湖も、いつ決壊してもおかしくない状況です。洪水が起きてしまえば、周辺の村は水没してしまうでしょう。何とか食い止めなければいけません。

振り返れば、富士山の清掃も当初は多くの人に批判されました。自分が拾うごみより、捨てられるごみの方が圧倒的に多かった。でも、清掃活動への参加者は年々増え、今では「ごみがないじゃないか」と文句を言われるほどです。物事の変化は、じわじわと進んでいくものです。5歩進んだと思ったら、4歩下がってしまう時もある。でも「0」にはならない。最初の1歩は残っています。それを足掛かりに、次の一歩を踏み出す。そうやって「続ける」中で、大きな変化になっていくのです。僕はこれからも、自分でできることをコツコツとやり続けていきます。そうやって皆ができることをやり、協力していけば、きっとすごい力が生まれると信じています。

のぐち、けん

1973年、米ボストン生まれ。亜細亜大学卒。99年、25歳で7大陸最高峰の世界最年少登頂記録を樹立。富士山清掃活動をはじめ、シェルバ基金設立、被災者支援などを行う。



